

学界の動向

第8回日本看護技術学会学術集会を開催して ～生命・生活・希望を支える看護のわざ～

岩 元 純*

日本看護技術学会は、現日本赤十字看護大学学長である川嶋みどり教授が創設したもので、第一回の学術集会を東京で行ったあと、本州の有力な看護系大学の所在地で開催されてきた。学会の英語名は Japanese Society of Nursing Art and Science であり、看護技術（アート・オブ・ナーシング）について深く掘り下げて研究し、エビデンスに基づいた看護に寄与することを目的としている。学会内には、技術を「アート」と捉えるナイチンゲール以来の伝統を重んじる気風が横溢しており、ナイチンゲール記章授章者でもある川嶋学長の創立の願いも、このような伝統的な考え方にしがたがったものであった。本学会は、学術雑誌を年間3回発行しており、現在の学会本部は群馬大学医学部保健学科に置かれている。現学会長は同校の小板橋喜久代教授（基礎看護学）である。また、年1回開催される学術集会は、一般演題（口演、示説）の他に、キーセッションと呼ばれる教育講演や学術講演の部分と、交流セッションと呼ばれるシンポジウム形式の発表からなっている。

さて、2009年9月26、27日の2日間に旭川クリスタルホールおよび神楽市民交流センターの2会場で行われた第8回学術集会では、上記のセッションに加えて事例セッションという臨床からの報告によるディスカッションを行うセッション形式も取り入れられ、キーセッション6題（旭山動物園長である坂東元氏の講演を含む）、交流セッション12題、一般演題数100題という内容であった。いずれのセッションにおいても、活発な質疑がなごやかな雰囲気の中で行われた。また、ランチンセミナーでは、奈良の畿央大学教授山本隆先生による「おいしさと健康」の講演が行われ、普段

聞くことのできない「おいしさの知覚」に関する碩学の貴重な話を聞くことができた。公式の大会登録者数は512名であり、加えて地域の看護系の大学や専門学校の3年生を合わせて50名ほど招待したので、4つほどの看護系学会が同時期に北海道で開催されたわりには、まずまずの規模の学会となった。

学術集会の開催場所としての旭川クリスタルホールは、札幌の多くの学会施設に比べれば、施設としての充実度は劣ると思われるかも知れないが、本大会の参加者たちからの感想を聞く限りでは、かなり満足度の高いものであった。2日間ともに晴天であったことが功を奏して、周囲の緑地が美しく太陽に照り映えたために、参加者たちの気持ちを大いに和ませた。また、手前味噌であるが、スタッフのもてなしの心が隅々にまで行き届いており、それが自然な形の温かい対応となって参加者たちに好印象を与えたようであった。例えば、各会場にさりげなくラベンダーのブーケを置いたり、ゆったりとした空間で食事を取れるように配慮したり、ディスカッションの場であるポスター会場に無料のコーヒーサービスコーナーを設置して、コーヒーのアロマがディスカッションの激しさを和らげるようにしたりと、女性ならではのアイデアが随所に見られ学ぶところが多かった。クリスタルホールの他に神楽市民交流センターも会場として使用させてもらったが、木造館を初めとして美しい木材を用いた部屋がとて好評であった。当たり前のことかも知れないが、会場の美しさや空間としてのくつろぎ感などは、学会の印象にかなりの影響を与えることがあらためて認識させられた。学会初日の夕方にエクスカッションとして旭山動物園見学と動物園内レストランでのレセプ

*旭川医科大学 医学部看護学科

ションを企画したが、こちらも70名の募集がすぐに満杯になるほど盛況であった。全国的に有名になったとはいえ、多くの学会参加者にとって旭山動物園を見学するのは初めてであつたらしく、実物の迫力に感動を覚えたとの感想を多数頂戴した。さらに、料理のすばらしさと黄昏の美しさが相乗効果を發揮して和気あいあいとした雰囲気のレセプションとなり、楽しいひと時を過ごすことのできるパーティーとなった。

最後に、看護と看護技術という概念の関係について述べて、本学会の活動へのご理解を賜りたいと思う。看護と看護技術は、目的と手段のようにとらえがちだが、看護技術を狭い概念でとらえると、「看護の実践には看護技術のみではなく、もっと看護する心や、幅広い知識が必要であるという」などという言い方のほうが支持を得やすくなる。しかし、看護技術をもっと包括的で幅広い概念、すなわち「心技一体のわざ」としてとらえなおすと、「看護技術」が、看護を支える総合的な技術であることがわかる。実は、ナイチンゲール自身が、著書の中で「Art of Nursing=看護技術」を幅広い知識や優れた倫理性に支えられたわざとして繰

り返し述べている。つまり、「心技一体のわざ」として看護技術を捉えているのである。蛇足になるが、ナイチンゲールが看護を学ぶまえに、統計学や数学を習得することを行ったことはあまりにも有名である。公衆衛生学、建築学、今の言葉でいうところの環境科学などといったことにもナイチンゲールは関心と理解を示している。

さて、アートが技（わざ）であるということをもう少しだけ具体的に表現すると、レベルの高い観察力、洞察力、知識、実行力、共感力ということができる。そして、実際看護の技が發揮される場面は、日常生活援助であり、これに医療上の援助が加えられることになる。日常生活援助は人が生きるための基本的な援助であり、心と体の両方に対してなされなければならない。すなわち、人々の生活をより充実して尊厳あふれるものにするために必要なことを可能な限り実践することがより豊かな看護の技であり、その達成に向かって研究を重ねていくことが本学会の責務であると考えている。

本稿の執筆者である岩元 純氏は、2009年12月31日に
逝去されました。謹んでお知らせ申し上げます。

(本誌編集委員会)